
勇者はいつも竜を殺す

山本 水城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者はいつも竜を殺す

【Nコード】

N7636X

【作者名】

山本 水城

【あらすじ】

俺はスケアクロウ、警官あがりのトロントの私立探偵。クリスマスも直前の冬本番、アパートのおんぼろオイルヒーターがとうとういかれちゃったというのに、ゲイの大家は知らん顔を決め込んでいる。いつも昼飯に行く「フィッシューマンズ・ワーフ」では、また自身のフライが品切れ。ダイアルアップ接続のインターネットは、とてつもなくとろくさく、スパムメールにもうんざりする毎日だ。まあいい、そんなことはいつものことだ。だが、月曜日の朝、とんでもない依頼人が、オフィスの前で俺を待ち構えていたところから、こ

とは始まった。

i n t r o d u c t i o n

バスローブの前を掻き合わせ、素早く左右の様子を窺うとアリッサ・ゴールドウインは、夫の書斎にすべりこんだ。

後ろ手にドアを閉めたが、鍵はかけなかった。

ローブの合わせ目を気にしながら、部屋のほぼ中央に置かれているオーク製のライティングデスクへと急ぎ足で歩み寄り、デスクランプを点けた。

そして、デスクの上に置かれている夫のアタッシユケースのダイヤルキーを慣れた手つきで合わせ始める。

ロックをスライドさせると、アタッシユケースの蓋が音を立てて開いた。

眼鏡ケース。

ウェブサイトのプリントアウト。

週刊誌。

順番に中身を取り出すと、アリッサ・ゴールドウインは、デスク横のロココ調のカウチの上に几帳面に並べ始める。

中身を、完全に元通りに戻せるようにだ。

続いて、PDAと携帯電話を取り出す。

携帯のアクセスロックを慣れた手つきで解除し、通話記録、住所録、メールの中身を手早くチェックする。

カウチの坐面一杯にアタツシユケースの中身を並べ終えた時、底の方に、これまで見かけたことのない黒い袋があることに、アリツサは気が付いた。

バックスキンでできたその袋を手にとると、アリツサは紐を緩めた。そつと右手を中に差し入れる。

「ひっ……!!」

声にならない短い悲鳴をあげ、アリツサは、袋の中身を思わず床に取り落とした。

「それ」は、毛足の長い絨毯に半ば埋もれながらも、グロテスクな姿をオレンジ色のランプの明かりの下に晒していた。

十二月二日(月) (1)

1

シーツの隙間から染み入ってくる冷気で目が醒めた。

二、三度寝返りを打って瞼ををきつく閉じてみたが、まどろみは、すっかり寒気に追いやられてしまった。

観念してベッドから体を起こす。

朝はいつも泥のような気分だ。

最近は特にそう思う。

身体を極力ベッドから出さないようにして、手近の椅子の背に投げたあるセーターに手を伸ばす。

毛布から出た腕を伝って、背中の方まで、寒気が落ちてくる。

今朝はまた、とんでもなく冷え込んでいる。

毛布を被ったまま、あちこち突っかかりながらも、俺はやっとセーターを着終わった。

着古したジーンズに脚を通すため、仕方なしにベッドから起き上がる。

「働けよ」と壁のオイルヒーターに悪態をつき、パネルを蹴飛ばしてみる。

自分の足が痛んだだけに終わった。

随分前に止まっていたのだろう、パネルはスケートリンクの表面の

ようだった。

半ば無意識に冷蔵庫から卵を一つ取り出し、コーヒーマシンの空のサーバーに入れた。

レンジの上に掛けっぱなしであるヤカンに水を汲む。

そこからコーヒーマシンのタンクにちょうど6カップ分の水を注いだ。

コーヒーマシンのスイッチをいれ、またヤカンに水を足し、レンジに戻して火を付ける。

溜息をつきながらバスルームに向う。

湯の方の蛇口を全開にし、俺は出る水が温まるのを待った。

うつすらと湯気でくもった鏡には、まだらに髭の伸びた三十男がうつっている。

左手で顎をなで上げ、そのまま寝癖で逆立った短めの髪の毛を撫で付けてみる。

どういった寝方をするとこんな髪型になるのか、俺にもよく判らない。

何度掌で頭を撫で付けてみたところで、ショートヘアのレニングレードカウボーイといった有様には、たいした効果はなかった。これもいつものことだ。

髪も髭も、煎り始めのコーヒー豆のような色だ。身分証の記載は、一応「プラチナ・ブロンド」。

物は言いようだ。

鏡をのぞきこむと、階下のゲイに「ロンドンズ・スカイ」と言われ

ているグレイがかった水色の目が、こちらを見返した。
ロンドンの空模様について、俺は特にコメントすべき事項を持ち
合わせていない。

別に、そのゲイだって気象予報士という訳ではないのだ。

溜ったお湯で顔だけを洗った。シェーバーとクリームは数日前から
切らしたままだった。

タオルで顔を拭いながらキッチンに戻ると、湯が沸いていた。
火を止め、棚からマグカップとティーバックを取り出す。

コーヒーマシーナには6カップ分の白湯と半熟卵が出来ていた。
スイッチを切り、サーバーの湯をゆっくりシンクに空ける。

空になったサーバーに冷水を満たして卵を冷やしている間に、マグ
カップにティーバックを放りいれ、ヤカンの湯を注ぐ。

ミルクでも入れるかと冷蔵庫を開け、テトラパックを取り出したが、
なんとなく嫌な感じがする。

「冷蔵庫には物を入れっぱなしにしちゃいけない」って言うのは、
誰の格言だったか……。

コーヒーマシーナから卵を取り出し、3分の2ほど殻をむいて齧る。
さほど、食欲があるわけではない。

塩を買ってこなければと思った。

確か、一昨日もそう思った。

兎にも角にも、ぼんやりとしている時こそ、身体に染み付いている
惰性の動作には逆らわない方がいい。

「いつもの手順」ってヤツを踏み違えたばかりに、妙な事に足を

取られてしまう。

いつも通り、焦げ茶のアップライトピアノの上に置いてある腕時計を右手首に着け、キーリングをポケットに入れた。

玄関のドアを閉める時に振り向いて、レンジの火が消えていることを確認した。

階段を降りながら、今日一本目のタバコに火をつける。

やっと意識が覚醒してくる。

最近、ますます立付の悪くなってきたフォードのフロントドアを叩きつけるように閉め、イグニッションを回した。

エンジンの回転数上がるのを待つ。

フォードとはいえ、もとは日本だが韓国だから作られたものらしい。特段の故障もなくこれまで乗ってきたが、もついい加減にあちこちガタが来ている。

十年選手のこいつを騙し騙しで発車させるのも、いつもの手順だ。

だが、どこかで何かを間違えてしまったんだろうか？

この日を境に、俺の「いつもの一日」は当分の間やってこなかった。

いつもどおり、俺とフォードは、通勤ラッシュにあたらない時間帯を選んで出発し、きっかり十七分でダイナー「フィッシャーマンズ・ワーフ」の猫の額ほどのパーキングに滑り込んだ。

店は相変わらず、パーキングの入口の段差を修理していない。
バンパーリムをこする嫌な音がする。

この街のどの車にも新品のサスペンションが付いてると思ったたら大
間違いだと、「フィッツシャーマンズ・ワーフ」の店主には、事あるこ
とに主張していたのだが。

サイドミラーに目をやると、トラッシュユビンを引きずりながら「フ
イッツシャーマンズ・ワーフ」の裏口からポーが出てきたところだっ
た。

俺の車の「ゴリゴリ」が合図みたいに、毎朝決まってこのタイミン
グだ。

車から降り、ドアを叩きつけて閉めると、ポーが近づいてきた。

「おはよう、ポー」

と、ポーは俺に挨拶する。

この言い方を俺は、最初はひどく奇妙に思った。

だが、理由が分かかってしまえばどうってことはない。

ポーは自分に言われたことと他人に対して言うべきことの区別が出
来ないのだ。

そして、ポーは、いつも張り付けたように笑顔を浮かべている。

「おはよう、ポー。今朝も冷えるな」

タバコのパックを取り出しながら、俺は答える。

「吸うか？」

「ポー、ありがとう」

これも同じ公式だ。

自分が礼を言われた通りに繰り返す。

……もしくは「ポーがありがとうと云う」という意味なのかもしれない。

ポーはおずおずとタバコを銜える。

俺は火を差し出してやる。

前後左右に体をゆらし、咳くように、時折、語尾を素っ頓狂に上げながら、ポーは礼の言葉を繰り返す。

風の音の中、かすかに紙の燃える音が聞こえる。

俺たちが吐き出した煙が、背中の方に流れていく。

湖から運河に風が吹き上げてくる時間だ。冷気が鼻腔の奥に凍みる。

「仕事は忙しいか、ポー？」

半分ほど吸い終わった頃で、俺は訊ねた。

すると、突然、「ぐずぐずするな！忙しいんだぞ、ポー！」と、ポーが店の親父の声色で怒鳴りだした。

俺は一瞬、その大声に肝を冷やした。

だが、すぐに「この様に親父に怒鳴られる程忙しい」という意味なんだろうと解釈した。

しばらくの間、忙しい、忙しいと、また噛み締めるように咳きながら、ポーは揺れている。

ポーとは毎日のように、ここでこうしてタバコを吸うが、こんな調

子で互いに大して話すこともない。
ただ、吸っている間は、ポーは仕事の手をとめて、何となく俺の横に立っている。

ポーはポーなりに、俺に気を使っているのだろうか？

俺も何となく一本吸い終わるまで、立ち去る潮が見つからない。
そもそも俺もたいてい、それほど急ぐ仕事があるわけでもない。

フィルターまで、あと1センチのところまで、きっかり大事そうに吸い終わると、ポーは吸殻を足で潰して几帳面に火を消し、自分の薄汚れたエプロンのポケットに入れた。

「今日、スケアクロウのランチは？」

「俺が昼飯をどうするかって？ さあ、まだ決めちゃいないな」

ランチランチ……。

相変わらず落ち着きなく前後左右に揺れながらも、ポーは手を腰のところまで曲げ、おいでおいでのしぐさをして見せる。

「ごみ捨てにいつまでかかっているんだ、ポー。とっとと戻って手伝え！」

裏口から「フィッシャーマンズ・ワーフ」の親爺が怒鳴りつけてきた。

抱えているプラスチック製の箱には、何やら赤黒いものが、大量に入っている。

ポーは自分の背丈ほどもあるトラッシュユビンを引きずりながら、慌てて店に戻っていった。

俺は助手席のドアを開け、置いてあった新聞を取って、脇に抱えた。ほとんどフィルターだけになったタバコを銜えたまま、パーキングを挟んで店とは反対側にある建物へと歩き出した。

前に一度、ポーの前で吸い終わってしまった時。

俺が地面に打っちゃっておいた吸殻を、ポーが摘まみ上げて自分の吸殻と一緒に、前掛けのポケットに入れたことがあった。

それ以来、俺はポーの前では吸殻を捨てないようにしている。

パーキングに面しているのは、オフィスの建物の裏側になる。

俺は正面の玄関へと回った。

このあたりは、割合古い建築物が残っている地域だ。

言葉を変えれば、おんぼろのビルディングが取り残されている一帯とも言える。

その中では、俺のオフィスは家賃のわりにましな方だった。

そんなうらぶれ方も、それなりに役立つ事があるらしく、この辺りでは、たまに映画撮影が行われている。

シカゴの下町であったり、ニュージャージーでのイタリアン・マフイア達の銃撃戦のシーンなんていうのに、うってつけだったりするらしい。

最近では、アンダーシャツ姿の刑事がテロリストと戦ったりする映画に使われていたのが、特に有名だ。

オフィスのビルの正面玄関には、ちょっととした車寄せが付いている。かつてはこの建物も、少しはまともな役目を果たしていたらしいことが僅かにうかがえる。

その玄関を入って右側に、各部屋の郵便受けの箱が並んでいる。俺は箱の数字錠をまわし、扉を開ける。

郵便受けの扉には、小さな黒いプラスチックの板が貼られていて、白の活字でこう刻印してある。

308 リード&アソシエイト探偵事務所

これが俺のオフィスで、俺は私立探偵をやっている。だが、俺はリードではない。

オフィスの名前にあるジェイク・リードは、一年半前に死んだ。

俺はオフィスの共同経営者だった。

つまり、「アソシエイト」の方だ。リードの遺言で、奴の分の経営権は俺が相続した。

だから、今やこのオフィスのオーナーは、俺一人ということだ。

リードは、俺を「スケアクロウ」と呼んでいた。知り合いはたいいてい、俺をそう呼ぶ。ポーもだ。

この名前に、特に意味なんか無い。

十二月二日(月) (2)

2

一日あたりタバコ十本の喫煙による健康被害を埋め合わせるために、俺は三階の事務所までは階段を使うことにしている。これで息があがるようになって来たら、禁煙の良い契機にもなるというわけだ。

ちなみに、膝が震えるようになってきたら、毎日八キロのジョギングをしようと考えている。

もちろん、それはトロントの日中平均気温が摂氏十五度を越えるようになってからの話だ。

膝も震えず、なんとか三階のエレベーターホールまでたどり着いた時、俺の視界の左端に、何か巨大な影がちらついた。

向かいの通信販売の会社が、先週あわただしく引き払っていったことが、ふと思い出される。

廊下に家具でも捨ててしまったのかと、苦々しい気持ちで、舌打ちした瞬間、粗大ごみが動いた。

「ちょっと！ あなたがリードさん？」

黄色いでかい鳥が出てくる子ども向けテレビ番組で、クッキー食ってる怪獣が、中年女性になったらこんな感じだろうか。その甲高い声が、俺に向って散弾のように飛んできた。

彼女は銀色の狐皮のコートを翻しながら、十二番径のスラッグ弾のように、俺に近づいてくる。

あの巨体を覆う為に、一体何十匹の獣が犠牲となったのだろうか。

フィルターだけになったタバコが、俺の口からぼとりと床に落ちる。

どのように自分の身を処しているのか咄嗟には計りかね、俺はホルの真ん中に立ち尽くしていた。

その間にも粗大ゴミは、ヒステリック・ヴォイスを連射させて、ホールの方に駆け寄ってくる。

「一体、何時になったら事務所は開くの？ 『ホームページ』には午前九時からって書いてあったわよ。一体全体、今何時だと思ってるの?! もう十時よ!」

……そう、ラッシュに掛からない様に、俺は毎朝時間をみはからって家を出ている。

かなり遅めに。

「申し訳ない、マダム。いや、ミス。営業時間を少々変更しまして……」

「それなら、ちゃんと『ホームページ』書き換えておいて頂戴! こっちはこれから仕事があるのよ!」

ホームページ……。

そんなものもあつた。そういえば。

事務所の開設時に、ウェブサイトを立ち上げたがったのはリードだった。

内容は全部リードが考え、俺はファイルを作らされた。

リードは流行には敏感だったが、コンピュータの扱いはからきしかったのだ。

「お前はやっぱり若いな、頼んだぞ、コンピュータ少年」とか何とか云われて。

まったくの家内制手工業バージョンだ。

「とにかく、早く事務所開けて頂戴。まったく」

しゃべる粗大ゴミ、もとい、デブばばあは、至近距離では凶器になりかねないような金切り声をあげ続けている。

こいつを事務所に通さなくてはならんのだろうか、俺は。

床に落としてしまった吸殻を拾い、ジャケットのポケットにそれを突っ込むと、キーを取り出した。

巨大なクッキー・モンスター。

あるいは、エスキモー・ポイントの土産物屋辺りに飾ってあるトドの剥製のようなデブばばあとオフィスのドアとの間に、俺は決死の覚悟で身体を入れ込み、鍵を差し込んだ。

ドアとばばあとの間で圧死しそうになる。

俺は焦って鍵を回す。

ドアが空いた途端、ばばあの腹に突き飛ばされるようにして、俺は部屋の中に転がり込んだ。

慣性の法則には逆らわないことにして、そのまま転がるように進み、突き当たりのデスクの後ろ、窓の下にあるオイルヒーターのコックを捻った。

もはやその場で力尽きんとするところだったが、俺は何とか踏みとどまった。

そして、一応礼儀として、ばばあにはいささかサイズが小さめと思われたが、この部屋では唯一のアームチェアを勧めた。

コートを脱いで、俺は気を取り直し、コーヒーマシンにフィルターをセットした。

すると、すかさずデブばばあが金切り声をあげた。

「私、時間がないのよ！ コーヒーなんかいいわ、まったく！」

回収時間より10分早く回ってきたごみ収集車に対するクレーム電話のような横暴さだった。

前言撤回。

くだんのクッキー好きの緑の怪物がいくら老けても、ここまで厭味にはなれないだろう。

ばばあにコーヒーを出してやりたいなどは、更々思っていないが、俺自身が「気付け」を必要としている。

ペーパーフィルターを取り出して折り、コーヒーマシンにセットする。

棚から、真新しいパックを取り出した。

スマートラ産の最高級のマンデリンだ。

中身は既に挽いてあったが、しっかりとパウチされている。

その新しいパツクの封を切ると、痺れるような至福の芳香が広がった。

この素晴らしいマンデルリンのドリップに関しては、俺は甚だ不本意ではあったがフィリップスのコーヒーマシンに一任する事にした。ネルで淹れたら最高なのだが……。

俺はデブばあの前に曲げ木のスツールを置き、そこに座った。そして、なんとか言葉を絞り出そうと努力した。

「それで、今日はどのような……」

デブばあは、額にファンデーションの皺がくつきりと寄るくらい、両眉をひそめてみせた。

「あなたね。一体、どういつつもりなの、自分の名前ぐらい先にいいなさいな。一体全体。名刺はないの?!」

そういえば。

小学校三年生の時、こんな「ばあ」がいた。生徒の描いた絵を、何だかんだといいながら、みんな紫色や橙色に塗りたくってしまう類の美術教師だった。

あいつの口癖も、「一体全体、まったく」だった。

……一体全体、なんて賤の悪い子なんですよ。この子は！ とかなんとか。

俺は立ち上り、デスクの引出しを探って、下の方から、まだ割合にきれいな状態の名刺を取り出してきた。

デブはばあに名刺をわたすと、俺はテーブルの上のメモ用紙を一枚剥がし、ジャケットからペンを取り出した。

今すぐに、熱いコーヒーが飲みたかった、たまらなく。

だが、間抜けなフィリップスはまだ、ごぼごぼと音をたてながら仕事 중이다。

部屋がだいぶ温まってきたことに気がついて、俺はジャケットも脱いだ。

程なく、マンデリンの香りの他に、何か別の臭いが漂っていることに気がついた。

ヒーターの効きがよくなってくるにしたがって、それは猛烈になってくる。

俺は思わず、ばあに尋ねた。

「なにか、その、つけてらっしゃいますか？ ミス……」

「ゴールドウィンよ、アリッサ・ゴールドウィン」

……アリッサ？ って。

そんな可愛い名前のつく図体かよ？！

心の中では激しく悪態をついたが、口には出せず、俺はただ唾を飲み込んだ。

「素敵でしょ？ チェコ産のラベンダーよ。無農薬の「最高級」品なの。わたしのお気に入り！ やっぱ自然のものが一番ね」

モノは自然なのかも知れないが。

装着分量は非常に不自然としか思えなかった。ラベンダー畑、三ヘクタール分はぶつかぶつてきたらしい。

俺の「最高級」マンデリンの芳香は、ラベンダーに敗北しつつあった。

三ヘクタールのラベンダー畑についても、ノーコメントのまま、俺は席を立った。

そして、プラスチックカップにコーヒーを注ぎ、ひとつをばあの前に置いた。

俺はスツールに腰かけながら、自分のカップに口をつける。

ドリップにおいて、ペーパーフィルターとコーヒーマシンを利用したという失点にもかかわらず、素晴らしい香りが喉から鼻腔に抜けた。

思わず溜息がこぼれる。

しかし、デブばああの金切り声によって、俺は再び我に返った。

「あなた、リードさんじゃないのね？」

矯めつ眇めつ、俺が出した名刺を見ながら「責任者を出せ」と、言わんばかりの口調だった。

「リードはいません。今は俺だけです」

「あら、そうなの？ あなた私立探偵の登録は、ちゃんとしてあるんでしょうね」

不満げな顔つきで、ばあは目の前に置かれたカップをとり上げた。

小指は立てるな！ ばばあ。
心の中で叫びながらも、俺は話を続けた。

「……非常に申しあげにくいのですが、ミズ・ゴールドウィン。当
事務所は、現在基本的に……その。個人からの依頼は、お受けして
おりませんで」

というか、こんなマイナーな個人事務所に飛び込みで来る客はなん
か、まずいない。

実際、最近俺の取り扱っている仕事の殆どは、大手探偵事務所から
の下請だ。

「お客を選べるようなオフィスには、見えないけど？」
デブばあは小指を立ててカップを持ったまま、大きく右眉を上げ
た。

主に目尻の皺を隠す用途で、一定年齢以上の女性によく用いられて
いる大振りのフレームの眼鏡。
その色付きレンズが、ばばあの鼻息でかすかに曇った。

「……うちの事務所の事はどちらで？ ウェブサイトをご覧になっ
たとおっしゃいましたか？」
俺は話を少し変えた。

「ええ、でも元々はお隣で聞いたのよ。あら、私、まだきちんと自
己紹介もしてなかったわ。アリッサ・ゴードウィン、トロント市近
隣サービス局のソーシャルワーカーですの」

黒いエナメル皮のハンドバックをまさぐり、プラスチックカードの
IDを取りだすと俺に見せた。

ああ……。

「お隣」ってのは、「フィッシャーマンズ・ワーフ」の事か。

そして、俺に二の句を継がせぬタイミングで、デブばああは言った。

「ここは、料金表ってないのかしら？」

いや……俺は、まだ引き受けるとも、なんとも。

「私の主人についてなんですの」

デブばああは、またハンドバックに右手を突っ込むと、何やら取り出した。

「これ。まず、ご覧になって頂戴！」

勿体ぶった口調で、ばああは右手で一食品保存用のチャック付きプラスチック・バック《ジップロック》をかかげた。

中には、ナマコぐらいの大きさの黒っぽい物体が入っている。

しばしの間の沈黙が流れた。

しかし、俺が唾を飲み込んだ音で、それは途切れた。

「……プラスチックとラテックスで出来た男性性器の模型、のように見えますが」

俺はやっとのことで口を開いた。

「そうなんですのよ、この『ヴァイヴレータ』、一体、どこにあっ

たとお思い?!」

そんなこと。

俺が知るわけがないだろう。

相変わらず、俺の返事を待つつもりも、聞くつもりもない様子で、ばばあは続けた。

「先週、主人のアタツシユケースを片づけてたんですの」

ケースの「中を」だろ? 正確には。

しかも、それは「片付ける」とは言わない。

「盗み見する」と言うのだ。

「そしたら、こんなものが!」

ああ、何ておぞましい、とか何とか言いながら、ばばあはテーブルの上に置いた。

俺は咄嗟に、自分のマンデリンを脇に退けた。なるべく、遠く。テーブルの端のほうに。

すると、アリッサ=デブばばあ・ゴールドウインの目は、色付きレインズの奥で嫌らしく笑った。

「あら、まさか、あなたこついうものを初めて見るって訳じゃないでしょ?」

ここまでエゲつないのは、初めて見るよ……。

俺は心の中でひとりごち、赤面しそうになるのをこらえていた。

ジップロックに入っていた物は、単に「ペニスの代用品」といった

範疇を越えていた。

直径はどう見ても、3センチ以上はあったし、側面には、シヨッキングピンクや蛍光グリーンのイボが、大量に付着していた。

亀頭……人体で言えば、だが……の部分にぐるりと一周、キャタピラのようなものがとりつけてあって、それがデイジーの花びらのように広がることにより、直径を更にに拡大できるようになっている。

付け根、もちろん、人体であればだが……の方には、コードが伸びていて、その端にはコントローラーのような物が付いていた。

「ええっと、ミセス・ゴールドウィン。ご主人のビジネスバックに、こちらが入っていたと。それで一体、ここの事務所にどうしると」

俺は、半分やけになって問い返し、カップのマンデリンを飲み干した。

「だから、こういった『モノ』を、主人が、どこで、どういった相手に使っているか、それを探して欲しいんじゃないの！」

「…その相手は、ええ、あなたではない、と」

「んまあ、失礼な。どういっ了見なんです。あなた、私がそんな人間に見えますの……！」

……というか、あந்தあの旦那は「そんな人間」なんじゃないのか？

まあ、このばあの場合、どこにどう利用するか、探し当てるのが色々大変そうではあるが。

いや、考えるだに気分が悪い。

「つまり、ご主人の素行調査をしろってことですか？」
二杯目のマンデリンを注ぐべく、コーヒーマシーバーを手にし、俺は何とかこの状況を收拾しようと言葉を挟んだ。

「そうよ。そして、これを使ったのが誰か『DNA鑑定』して頂きたいの」

……か、鑑定って？

「ええ、ミセス・ゴールドウィン。これをあなたが発見されたのが先週と仰いましたか。ご主人は、もう紛失に気が付いているのでは？ いつそ、ご自分で本人にお尋ねに……」

俺がこう提案すると、デブはあは、今度は口を窄めながら、まるで子どもに言い聞かせるように囁いた。

「すり替えたのが先週で、見つけたのはもっと前よ。そのまま持ち出したら主人にバレるに決まってるでしょ？ だから、すり替えたのよ、ちゃんと。これは、そうね……いわば『使用済み』の方よ。こういうものがあれば、できるんでしょう？ 鑑定」

……論点が、ずれている。

「同じ物見つけるのに、ちょっと時間かかったわ」

俺には良く分からない。

どこで、どうやったらこんなモノと「同じ」物を見つけて来られるというのか。

そもそも、何故そこまでしてすりかえる必要が？

浮気相手を見付けたいだけなのなら、そんな鑑定をする必要性など、どこにもないのだが。

「鑑定、とおっしゃいますが。ミセス。身体の一部もしくは粘膜や分泌物の一部を鑑定するとしても、それと照らし合わせるべき標本が必要になるんです、つまり……」

鑑定鑑定と主張するばあに、そもそもDNA鑑定つてものが、どんなもので、何の為に行うのかって事を説明しようと、俺は努力してみた。

「その、ヴァイブ……からですね、採取したものの他に、比較したい相手から採取した標本が必要なんです。比較対象となる人間と調査本体の標本が同一人物であるかとか、同一人物でありえない、とかそういうことをチェックするのが鑑定という……」

ばあは、俺の説明を遮り、すかさずこう言った。

「で、鑑定の料金表は？ あるの？」

俺はさらに努力を続けてみた。

「鑑定するには、比較したい相手の標本を手に入れる必要があるんです。たとえば、あんたの旦那の唾とか、浮気相手のフケとか。そういうものがあるんです」

「ですから。それを調べてほしいって、さっきから言ってるんじゃないありませんの！ 浮気調査なんだから」

デブばあは、また、厭味ったらしく、俺の頭の天辺から爪先まで

眺め回しながら叫んだ。

だめだ。

まったく話にならない……。

俺は思わずため息をつき、それ以上の説明は諦めた。

そもそもトドには、人間の言語は通用しないのだ。

英語という言語が論理性に乏しいと言うわけでも、俺のコミュニケーション能力に問題があるというわけでもない。

「DNA鑑定は比較する相手の数で金額が決まります。調査本体のサンプル作成料に対して、相手のサンプル作成料と比較検査費用に人数を掛けて、それに、付加価値税……」

素直に料金の説明をする事にして、俺はふたたび曲げ木のスツールから立ち上がった。

そして、壁際に置いてあるリードの書類キャビネットを開き、中のファイルの背文字を左手で順になぞっていった。

リードがいた頃は、下請け以外の仕事も多少は扱っていたから、科学鑑定を専門に扱っている業者ともやり取りがあった。

超大手事務所に限って言えば、まれに自前のラボを抱える事もあるようだ。大抵の事務所は、そういった業者に外注に出す。

例えば。

うちの事務所で受けてた依頼がどんなものかと言つと……。

いきなりブラジルから現れたガキに遺産の取り分を要求されて、パニックに陥った相続争い中の家族が、そのガキが本当に死んだ旦那

ガリオで浮気した時に出来た子供かを確かめると大騒ぎをして駆け込んできた、といった感じで始まる。

簡単そうな調査に見えるって？ とんでもない。

まず、死んじまった旦那の標本を取ってくるのが難儀だ。墓の改葬許可書を取るのは時間もかかるし、面倒だ。

よって、ひたすら、旦那の遺品を捜すわけだ。

それこそ自分の尻の穴に突っ込んだヴァイヴでもあれば万々歳なんだが……。

まあ、下着からから何から、持ち物を引っ掻き回して「何か」付いてないか探す。

一方の「ガキ」のほうも、やっかいだったりする。

最近では頭のいいヤツが多くて、基本的に標本採取の同意書には、サインを渋る。

特に、確信犯でカタリをやっている場合は、標本を採取されることを見越して、コーラの缶からタバコのフィルターまで気を付けて始末をしたりして、まったく手に負えない。

リードは基本的にマメなヤツではなかった。

俺もそうだが、まあ、リードよりはました。

ヤツは「いつかはやる」と言い続けてきたキャビネットの中を、すべて整理し終える前に死んでしまった。

それ以後、そういった余分なことに割く時間とエネルギーは、俺にはなかったから、このキャビネットは片付かないままなのだ。

そんなことを思い出していると、キャビネットの二段目から、ラボ

に外注に出す際の金額表がファイルされているが見つかった。

もう何年も前のファイルだった。

値上がり分が五パーセント位で、客に対する手数料分で十パーセントは割り増しした上で、タックスを掛けて……。

俺は頭で計算しながら、そのファイルを繰り、ばばあに向かって適当な金額を読み上げてやった。

いざ、俺が滔々と金額の説明を始めると、ばばあはさも面倒くさそうに手を振り、それを遮った。

「ああ、もういいわ、わたし、時間がないのよ！」

ばばあはこう言って、アームチェアから立ち上がった。

「私、ちゃんと、他所の見積もりも取りますからね、ぼったりしたら承知しないわよ……！」

こうおらぶと、引ったくるようにハンドバックを手に取って、アリス・ゴールドウィンはドアへと向かって歩き出した。

俺はまだ何も引き受けちゃいないというのに、だ。

言いたいことだけ言い放ち、時間が無いと帰ろうとするトドのような女を、俺は辛うじておしとどめた。

やっとのことで彼女のIDのコピーを取り、旦那の名前と住所、彼女の携帯の番号を聞き出してメモを取る。

そして、これが最大の難関であったが、初回の依頼時に規定で徴収している調査着し金を支払いを求め、振込を確認次第、調査に着手する旨と、着し金は最終的な調査費用と相殺する旨、個人情報保護誓約等を印刷した依頼用紙に、何とかサインをさせた。

途切れることなく金切り声で文句を言いながら、ドアを叩きつけるようにしてアリッサが事務所を出て行くと、しばしの残響の後、やっと事務所に静寂が訪れた。

靴音が遠ざかって行き、表の道路からドアを開け閉めする音がした。そして、エンジン音が遠のいていく。

ふと見ると、テーブルの上に、例の蛍光色イボつき極太黒色ペニス入りのジップロックが置き去りにされている。

……あのばばあ。

どうあってもこれを「鑑定」させたいのか?!

こんな風に、まるで避けがたい天災のように、アリッサ・ゴールドウインは、俺の事務所にやってきたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7636x/>

勇者はいつも竜を殺す

2011年10月21日08時10分発行